



「弟も兄も」

2026 年 1 月

校長 森野 章二

兄は父親に言った。「このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。」
(ルカによる福音書 15 章 29 節)

上記の聖書箇所は、有名な放蕩息子のたとえの一部です。少し長いので、全てを引用することは避けましたが、ルカによる福音書 15 章 11 節～32 節をお読みください(※1)。

かいつまんで書くと、以下のような内容です。「ある人に二人の息子がおり、弟の方が父に自分の分の財産を分けてくれ、と言う。父は財産を兄弟二人に分けてやるが、弟は財産を持って旅立ち、放蕩三昧を尽くして無駄使いしてしまう。無一文になって食べる物もなく帰ってきた弟息子に父は温かく迎え入れ、お祝いの宴会を開く。兄はそれを見て憤り、父に抗議する。」その抗議の言葉が冒頭の聖書箇所です。

放蕩息子のたとえというタイトルで呼ばれる通り、この箇所は、自分勝手に放蕩三昧して無一文になって帰ったダメ息子を父が愛を持って受け入れるというところがクローズアップされ、罪人に対する神様の愛を描いているということが注目されてきました。しかし、それだけならば 24 節で終わりにするはずで、25 節～32 節の兄息子に関する記述は必要なくなります。

清教学園で学ぶ人達、あるいはこのような聖句メッセージを読んでもくださるような皆さんの中には、弟息子のように後先を考えず放蕩三昧をして財産を食い潰すような人はあまり多くないかもしれません。むしろ兄息子のように真面目に働いて言いつけも守るような模範的な人が多いのではないのでしょうか。もちろん、それはとても大切なことです。

しかし、ボロボロになって帰ってきた弟を父が優しく受け入れた時、兄息子の内側に隠されていたドロドロした不満が爆発します。「真面目にやってきた私に、あなたは子山羊一匹くれなかった。それなのにあんな奴が帰って来たら肥えた子牛を振る舞ってやるのか。」

兄息子の言葉には、怒りと同時にある種の冷たさも表れています。自分の弟のことを「あなたのあの息子」(30 節)と呼んで切り捨て、顔を見に行こうとしません。

あなたが、自分は真面目に頑張ってきたと自負する人であれば、兄息子が怒るのも当然だ、と考えるかもしれません。しかし、兄息子は見過ごしています。父は、財産を二人に分けてやった(12 節)のです。だから、「わたしのものは全部お前のものだ。」(31 節)と父は語るのです。そして、兄息子が「あなたのあの息子」と突き放した弟息子を「お前のあの弟」と呼び変えます。



兄息子は恐らく考えていたのでしょう。「俺はずっと真面目にルールを守ってやってきた。欲しい物も我慢してきた。俺こそが評価されるべき者じゃないか。あんなダメ人間の罪深い弟を愛し、受け入れる父はどうかしている。」と。

しかし、父は兄も弟も同様に愛していました。放蕩三昧して財産を食いつぶした弟息子の罪も、うわべは真面目に暮らしながら、心の中に常に不満を抱き、家族を切り捨てる心の闇を持つ兄息子の罪も、どちらも赦して受け入れたのです。

今の時代、ネット上だけに限らず、他人のことを批判し、非難することで自分を持ち上げようとする人達で満ちています。特に「真面目に生きてきた」と自負する人達に、そのような傾向が強いようです。まさに兄息子の姿です。あんな奴らと俺は違う。あいつらは何も分かっていない。しかし、「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」(ルカによる福音書 18章9節～14節)^(※2)

大きな躓きを経験した弟息子のような人も、一見順調な人生を歩んできたように見える兄息子のような人も、神様の前には同じように罪人であり、同じように愛されている存在なのです。

他人から批判され、非難され、攻撃される人も、他人を批判し、非難し、攻撃する人も、どちらもその心は疲弊し、何も良いものは産み出されません。神様の赦しと救いの恵みを伝える聖書のメッセージがいつの時代にも必要とされる所以です。